

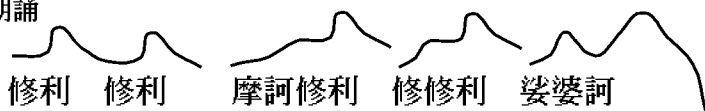
Tenor
1

骨のうたう (竹内浩三の詩による)

高橋悠治
1999

こうごう
(口業)

朗誦



修利 修利 摩訶修利 修修利 娑婆訶

語り

己のうたいし ことのはのかずかずは ^{チイズ} 乾酪のごと ^{ビール} 麦酒のごと
光うしないで よどみはてしは わがこころのさまも
かくありなんと ^{あかし} の証なるべし

朗誦

うたうまじ かたるまじ ただ黙々として 星など読まん 風などきかん
口業のあさましきをおもいて われ 黙して 身をきり 臓をさいなまん

以下同様

ただ苦行こそよけれ ただに ^{ねはん} 涅槃をおもい 顔色を和らげ 善きことせん
無声もて 善きことせん

(うたうたいは)

● =自由 ○ =長く ♪ =短く) =息継ぎ / =自由な休止



うた うたいは うた うたえと きみ 云えど くち おもく



うたうたえ ず。 うた うたいが うたうたわざれば



死つるよりほか すべなからんや。 うおのごと あほあほと



生きるこそ かなしけれ。

Tenor

2

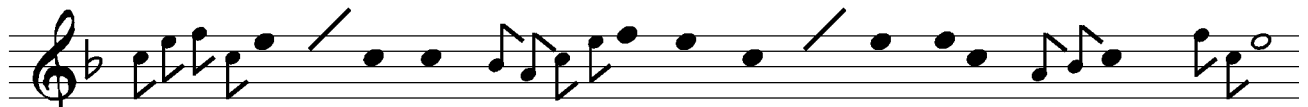
(望郷)

語り


東京がむしように恋しい。カスバのペペル・モコみたいに、東京を望郷しておる。



1. あの まち あの みち あの かどで おれや おまえや
2. あの 部屋 あの おか あの くもを おれや おまえや
3. あの えき あの とき あの でんしゃ おれや おまえや



あいつらと あんな ことしてああいうて あんなふうしてあんなこと
あいつらと あんな 絵をかきあんな詩を あんなにうたってあんなにも
あいつらと あああ あんなにあのまちを おれはこんなにこいしがる



あんなにあんなに くらした に
あんなにあんなに くらした に
あ かいりんごを 見てい て も

こつ
(骨のうたう)



Tenor

4

こつはこつとして 勲章 をもら い たかくあがめ られ

ほま れ はたか し なれど こつはこつこつは聞きたかった

絶大な愛情のひびき を聞きたかった それは なかった

がらがらどんどん事務と常識がながれていた こつはこつとして

あがめ られた こつは チンチンおとを立てて こになった

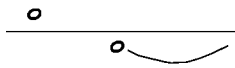
ああ 戦死やあわれ ここくのかぜは こつを吹きとぼした

ここくは発展にいそがしかった おんなは化粧にいそがしかった

なんにもないところで こつは なんにもなしに なった

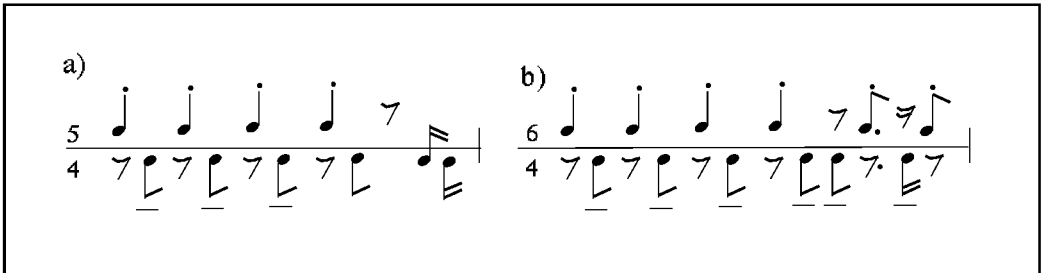
骨のうたう (竹内浩三の詩による)

高橋悠治

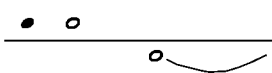
(口業) 2 gongs 

tempo rubato

jembe



a)とb)を混ぜ、すこしずつ変化させながらつづける


(うたうたいは) 2 gongs 

以下tacet

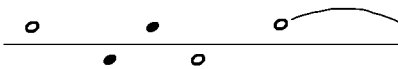
(望郷) 2 gongs 

tingklik

tempo rubato



EとAを中心にし F# とC# を加える

(骨のうたう) 2 gongs 

tingklik

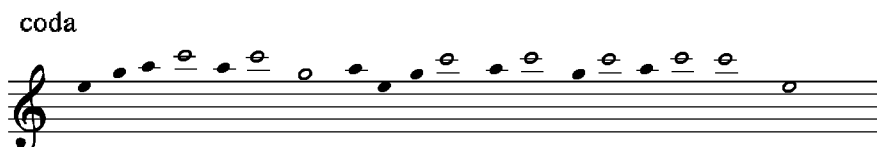
tempo rubato



すべてのキーをつかい F# とC# を中心にし
 歌にあわせてそのどちらかに終止
 後半はAに半終止することあり

calung

coda



骨のうたう

竹内浩三

口業 (こうごう)

修利修利 摩訶修利 修修利 娑婆訶

己のうたいし ことのはのかずかずは 乾酪 (チーズ) のごと 麦酒 (ビール) のごと
光うしないで よどみはてしは わがこころのさまもかくありなんとの 証 (あかし) なる
べし

うたうまじ かたるまじ ただ黙々として 星など読まん 風などきかん 口業のあさま
しきをおもいて われ 黙して 身をきり 臓をさいなまん ただ苦行こそよけれ ただに
涅槃 (ねはん) をおもい 顔色を和らげ 善きことせん 無声もて 善きことせん

うたうたいは

うたうたいは うたうたえと きみ云えど 口おもく うたうたえず。うたうたいが うた
うたわざれば 死つるよりほか すべなからんや。魚のごと あほあほと 生きるこそ 悲
しけれ。

望郷

東京がむしように恋しい。カスバのペペル・モコみた
いに、東京を望郷しておる。

あの街 あの道 あの角で
おれや おまえや あいつらと
あんなことして ああいうて
あんな風して あんなこと
あんなにあんなに くらしたに

あの部屋 あの丘 あの雲を
おれや おまえや あいつらと
あんな絵をかき あんな詩を
あんなに歌って あんなにも
あんなにあんなに くらしたに

あの駅 あのとき あの電車
おれや おまえや あいつらと
あああ あんなにあの街を
おれはこんなに こいしがる
赤いりんごを みていても

骨のうたう

戦死やあわれ
兵隊の死ぬるやあわれ
とおい他国で ひょんと死ぬるや
だまって だれもいないところで
ひょんと死ぬるや
ふるさとの風や
こいびとの眼や
ひょんと消ゆるや
国のため
大君のため
死んでしまうや
その心や

昔いじらしや あわれや 兵隊の死ぬるや
こらえきれないさびしさや
なかず 咆えず ひたすら 銃を持つ
白い箱にて 故国をながめる
音もなく なにもない 骨
帰っては きましたけれど
故国の人によそよそしさや
自分の事務や 女のみだしなみが大切で
骨を愛する人もなし
骨は骨として 勲章をもらい
高く崇められ ほまれは高し
なれど 骨は骨 骨は聞きたかった
絶大な愛情のひびきを 聞きたかった
それはなかった
がらがらどンドン事務と常識が流れていた
骨は骨として崇められた
骨は チンチン音を立てて粉になった

ああ 戦死やあわれ
故国の風は 骨を吹きとばした
故国は発展にいそがしかった
女は 化粧にいそがしかった
なんにもないところで
骨は なんにもなしになった

「骨のうたう（竹内浩三の詩による）」 高橋悠治

竹内浩三は第二次世界大戦中23歳で戦死した。ここではかれの詩4篇を歌にした。最も知られた詩「骨のうたう」は、流布している友人による編作ではなく、原形による。

「骨」は遺骨のことで、ホネではなくコツと読むのが当時の慣例と言われる。

打楽器は、バリの竹のシロフォン・ティンクリックと小さなメタロフォン・チャルーン、アフリカの太鼓ジャンベ、タイのゴングを使い、それぞれの基本型をうたに添って、即興で変形してゆく。もしこの楽器がない場合は、演奏者の判断で代用すること。

歌と打楽器は、いくつかの音を共有するが異なる数音の上で、それぞれの音楽をききながら独立に進行する。日本の兵士と東南アジアの村の女は一つの風景のなかにおいて、心が触れ合うことはない。

この歌はもともと吉原すみれの依頼で彼女の恩師である鈴木寛一と二人で演奏するための曲として書いた。歌はテノール用、高すぎる場合は、移調できない（バリの）打楽器をそのままにして、歌だけを移調する。（うたうたい）は4度下げ、（望郷）は短3度下げ、

（骨のうたう）は4度下げる。ただしピッチは西洋標準のものではないので、上の音程は目安にすぎない。